

平成24年度 教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	管24K09	氏名	吉田 佳代
研究主題 —副主題—	若手教員の授業力を高める手立てについての一考察 —ベテラン教員の授業参観・記録分析を通して—		
所属校	江東区立明治小学校	派遣先	帝京大学教職大学院

項目	内容
I 研究の目的	近年、東京都においては、若手教員の授業力向上が急務になっている。しかし、教員の多忙化、同僚性の低下等により学校では日常的業務に研修時間を確保するのが難しい状況にある。また、若手教員にとって、大学で学んできた教職の学修が即実践に役立てにくい現状もある。一方、筆者の現所属校には、学級経営の優れているベテラン教員がいる。このベテラン教員の授業記録をとり、学級経営の方法を言語化して若手教員に伝えていくことが授業力向上のための一助となるのではないかと考えた。
II 研究の方法	<p><b>1 先行研究の検討</b> 授業記録、授業分析について、学級経営の視点から先行研究の分析を行った。 ○授業分析、授業参観の視点の方法、先行研究の授業記録・分析の読解</p> <p><b>2 若手教員の実態調査</b> (調査時期) 2012年9月下旬 (調査対象) 東京都A区(初任者～5年目以内)小学校教員(養護教諭は除く)255名 (調査方法) 質問紙調査(A区全小学校に質問紙を送付し、回答を依頼) (調査項目) 日常の授業実践における難しさ(10項目)、授業を参観する視点(11項目)、授業記録のとり方(9項目) (回収率)100%(未回答なし)</p> <p><b>3 ベテラン教員の授業参観・授業記録分析</b> ベテラン教員の授業を若手教員と一緒に参観し、授業記録をとった。授業後は、授業記録分析を主とした省察を行った。 (1) 若手教員と共に行う「ベテラン教員の授業 参観・授業分析」 (2) ベテラン教員の授業記録を基にした「学級経営の視点」からの分析 ベテラン教員の授業記録を分析したところ、子供たちへの発問・指示には、学級経営を行う上での多方面のメッセージが込められていることが改めて明らかになった。したがって、これらの言葉を分類・整理し、10項目に分けて分析を行った。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>①学習規律・ルール ②発表方法(声の大きさ・トーン) ③学び合いの組織化 ④発言のフォロー ⑤賞賛 ⑥受容 ⑦激励 ⑧叱責 ⑨存在感の確認(クラスの一員として) ⑩ユーモア・笑い</p> </div>
III 研究の結果	<p><b>1 調査の結果</b></p> <p>(1) 3年目の教員の「意識低下」 ほとんどの項目において、3年目の教員の意識が低下していることが分かった。初任者・2年目と横ばいだが、3年目になると急に下がって、4・5年目でもち直すというパターンが多い。例えば、授業を参観する際の視点を尋ねる11項目中、最も意識が低い項目が七つ(「学習環境」「教員の発問・指示」「教員の表情」「教員の個別指示」「児童への反応」「児童のノート」「板書)があった。</p> <p>(2) 学校規模による教員の意識の差異 中規模校の教員の方が単学級の学校の教員より多面的に授業を参観したり、書きとめたりしていることが分かった。しかし、単学級の学校の教員は、可視化されやすい発問や板書などを見て書きとめる割合は、中規模校の教員の平均よりも高い。</p> <p>(3) ベテラン教員、若手教員の参観の視点を比較(筆者の国語5年授業) ベテラン教員Cは学級経営の視点で、若手教員は教科教育の視点で参観していることが分かった。しかし、授業後の省察を通して、学級経営の視点からの気づきを伝えることができるようになってきた。</p> <p>(4) その他 経験年数に関わらず、授業参観の視点で「発問・指示」を見たり、書いたりする教員が一番多い。「教員の表情」をよく見ているのは、初任者の教員である。</p>

	<p><b>2 授業記録の有効性</b>  授業記録が、授業力向上の一助になることを若手教員Bの成長を追って立証できた。当初、若手教員Bは、授業記録には「教員の発問」のみを書きとめていたが、「記憶は消えてしまうけれど、授業記録を書いておけば残せる」と発言できるまで変容した。</p> <p><b>3 若手教員の成長</b>  授業記録を書くようになった若手教員は、自分の気づきを、授業記録の叙述を根拠として、発言できるようになった。また、授業参観の機会を提供してくれた教員に対して感謝の気持ちをもつようになってきた。授業記録を書く機会を与えてくれた、ということは自分の授業力向上の機会を与えてもらったという意識に変わったことから、若手教員の成長を実感できた。</p> <p><b>4 若手教員の実態調査からの研修提言</b>  学校の規模、経験年数で、教員の意識に差があった。そのことを踏まえて、研修内容の見直しが必要と考えた。そこで、次の提言をする。</p> <p>(1) 経験年数による研修内容の充実  初任者には、「授業全体を見渡す力」「学級経営力」を育成する研修内容を充実する必要がある。2年目教員には、「個の学びに目を向ける内容」を考えていかなければいけない。3年目教員は、他の経験年数の教員より「意識の低下」が分かった結果を踏まえて、もう一度「教員の仕事のやりがい・役割・魅力を再確認したり、悩み・不安を解消できたりするような内容」を企画する必要がある。4年目の教員には、「授業を構成する要素に特化した項目の内容」を意識した研修内容を組み立てる。5年目の教員は「個への対応力や授業を総体的に見る力の育成」に力を注ぐ研修内容が求められる。</p> <p>(2) 学校規模による研修体制の提案  単学級の学校の教員は、同学年の他学級と進度・達成状況を比較することがない。そのため、授業参観時は可視化されやすい「教員の指導技術」を中心に見て、授業を支える多面的な要素についての注目が少なかったことが分かった。  このことから、単学級の学校の教員には、児童への指示、児童の反応、達成状況等、「児童の見取り」に絞った細かな視点を意識させる研修を提言する。</p> <p><b>5 「学級経営力」の必要性</b>  ベテラン教員Cの授業記録を学級経営の視点10項目で分析したところ「授業の中で学級経営を行っている」点が明らかにできた。よい授業は学級の規範意識が育っていないと成立しない。まず、「学級の学習規律・ルール」を定着すべく、子供たちの規範意識を育成することが先決である。このことを「授業記録」の分析で検証できた。</p> <p><b>6 若手教員の授業観察の視点の提案</b>  「第三章 若手教員の意識調査の結果」と「第四章 授業記録の分析を通して」の双方を併せて考えた結果、以下の項目が若手教員が授業参観する視点として、大切であると考えた。</p> <table border="1" data-bbox="391 1523 1417 1585"> <tr> <td>①学習規律・ルールの浸透</td> <td>②教員の発問・指示</td> <td>③教員の賞賛・叱責</td> <td>④児童の発言・活動</td> </tr> <tr> <td>⑤児童のノート・作品</td> <td>⑥児童の学習の達成状況・評価</td> <td>⑦板書</td> <td></td> </tr> </table>	①学習規律・ルールの浸透	②教員の発問・指示	③教員の賞賛・叱責	④児童の発言・活動	⑤児童のノート・作品	⑥児童の学習の達成状況・評価	⑦板書	
①学習規律・ルールの浸透	②教員の発問・指示	③教員の賞賛・叱責	④児童の発言・活動						
⑤児童のノート・作品	⑥児童の学習の達成状況・評価	⑦板書							
<p><b>IV 考察</b></p>	<p>若手教員の实態調査、ベテラン教員の授業記録分析を通して、若手教員にどんな力を付けさせなければいけないのか、何が必要とされているのか等を把握することができた。今後は以下のことを意識して、取り組みたい。</p> <p><b>1 A区を対象とした調査が、普遍妥当性をもつものであるか</b>  東京都A区の若手教員を対象として調査したが、地域によって意識の違いが生じる可能性も出てくる。そのことを調査・検証する必要がある。</p> <p><b>2 ベテラン教員Cを参観した若手教員Bの成長が一般化できるものか</b>  若手教員Bが成長できたのは、彼の資質やおかれている環境に因る可能性もある。彼の成長を一般化できるように、検証を進めていかなければならない。</p>								

参考：向山 行雄 (2012) 談の「ベテラン教員の学級での授業参観における若手教員の着目の視点」より